

# 猿新聞

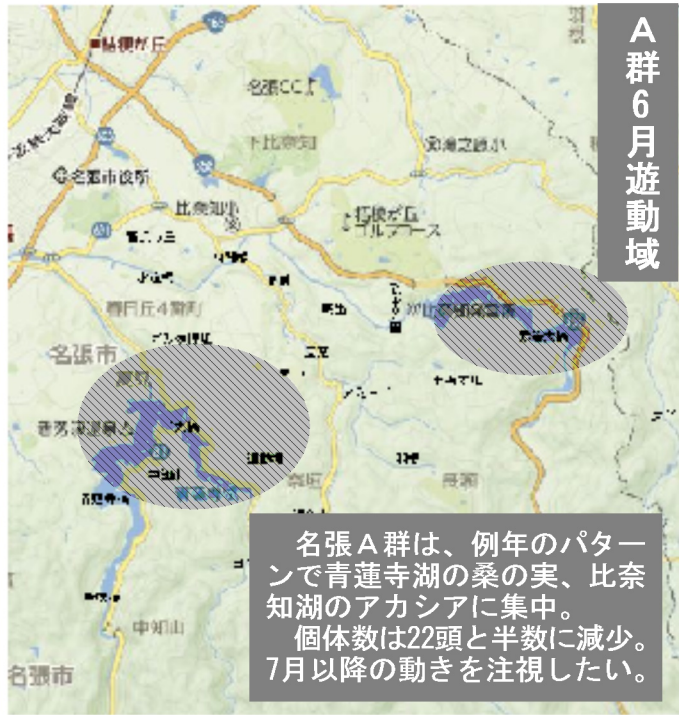
編集・発行者  
山村 準  
tel:0595-63-1725  
Email  
jyun.y@asint.jp

## 大量捕獲後の対策と群れの変化

宇陀・名張地域鳥獣

害防止広域対策協議会

では、平成28年初頭、



A群6月遊動域

名張A群は、例年のパターンで青蓮寺湖の桑の実、比奈知湖のアカシアに集中。個体数は22頭と半数に減少。7月以降の動きを注視したい。



B群6月遊動域

名張B群の遊動域は、森林と農地や住宅地との境界域に集中しており、自然林より二次林や竹林など利用している傾向が認められる。個体数は10頭未満に減少し、ゲリラ的な動きがみられる。

動きに変化がみられま  
す。統率者なくしたB群  
は、群の体をなしてな  
く各個体が「メンメン  
コ」に行動しているよ  
うに見受けられます。  
個体数が極端に減少  
すると、群れの遊動域  
を他の群れから守れな  
くなり、最後にはコド  
モがほとんど産まれな  
くなって消滅に至ると  
もいわれています。  
人間と野生動物と  
の関係は、時代や場所  
によってさまざまです  
が、野生動物は、奥山  
を生息圏に人は平地に  
暮らし、その間に簡単  
に超えられない里山が  
存在するという環境で、  
棲み分けが保たれ長い  
間人間と大きな軋轢も  
なく暮らしてきたので  
す。ところが、里山は  
いま人間に利用されず  
荒れ放題。現在では里  
山は、野生動物達の  
棲家に様変わり。里山の  
すぐ脇には畑があり、  
農作物が「ふんだん」  
にあり、しかも畑には  
人影が無く盗り放題。  
このような環境で暮ら  
すサルは殆どが奥山で  
の暮らしを知らません。  
産まれたときから農作  
物を食べその美味しい  
味を知ってしまったて  
いるサル達ばかりです。  
こうなってしまうと、  
対策が非常に困難にな  
り、今までやってきた  
対策では通用しません。  
今、「自分の畑は自

## 後を絶たないシカ被害

分で守る」から「地域  
の農作物は地域で守る」  
に体制転換を迫られて  
います。これには、農  
家・非農家を問わず  
「被害防止についての  
正しい知識を共有する」  
ことが不可欠です。  
これを踏まえ、名張  
鳥獣害問題連絡会では、  
大量捕獲後の対策を含  
めた、「地域で取り組  
む二ホンザル対策」研  
修会を開催しました。  
2面に関連記事。



大きく破損したネット



捕殺前

平成28年  
7月4日早  
朝、矢川で  
シカが防護  
ネットに絡  
み捕殺され  
ました。  
現在のし  
か防護用ネッ  
トは、化学  
繊維のネッ  
トが多く使  
用されてい  
ます。  
このネット  
は、オスジ  
カの角が絡  
みやすく  
絡んだら外れにく  
いため、シカが暴  
れて柵が大きく破  
損します。  
「食害より、柵  
の被害の方が金銭  
的に大きく痛い。」  
と農家。  
「シカのネット絡  
み」は、いまに始  
まったことではな  
く、矢川地区では、  
ネット柵が使用されだ  
して以来10年程になり  
ますが、毎年「ネット  
絡み」で2〜3頭が捕  
殺されています。  
鉄製の柵が開発され  
平地地域では盛んに利  
用されていますが、山  
間地域の圃場は、急傾  
斜の圃場状の田畑が多  
く設置には困難を伴い  
ます。また、設置でき  
たとしても畦畔の草刈  
りが問題です。  
このような急傾斜地  
での使用を考慮した柵  
の開発が待たれます。  
このように急傾斜地  
は、水路や交通量の多  
い道路など、どうしても  
も完全に閉鎖できない  
場所が出来てしまいま  
す。この部分の対  
策に課題があります。  
シカによる水稲食  
害は今のところ収穫  
に大きな問題はあり  
ませんが、このまま  
放置していると、生  
息数が多い地域では  
近い将来、甚大な被  
害が発生することが  
予想されます。  
また、森林でのシカ  
被害は農業被害に輪を  
かけて深刻で、農作物  
被害の比ではなく、そ  
れは、森林生態系にま  
で及び、それに伴う森  
林機能(国土保全・水  
資源の涵養など)の低  
下が今後さらに拡大・  
深刻化することが懸念  
されています。  
今後、行政・地域全  
体が、個体数調整など  
緊張感を持った対応が  
望まれます。

## アライグマ

夏は、アライグマに  
よる農作物被害の多発  
する季節です。  
アライグマは、サル  
やタヌキ、キツネなど  
の日本の在来動物とは  
異なり、北米大陸が原  
産で、ペットなどとし  
て日本国内に持ち込ま  
れたものです。  
現在、アライグマは、  
特定外来生物に指定さ  
れています。  
アライグマは、夜行  
性で、森林や湿地帯か  
ら市街地まで多様な環  
境に生息し、住宅の屋  
根裏、納屋などを営巣  
場所としている例が多  
くみられます。  
出産期は春で、一度  
に出産する数は通常3  
〜6頭ですが、流産  
や出産初期に仔が死亡  
した場合は、再度出産  
することもあります。  
また、森林でのシカ  
妊娠期間は約2か月、  
生後1〜2年で成熟。  
寿命は、野生では5年  
程度。  
食性は雑食性で、昆  
虫類、魚類、小動物か  
ら果実・野菜・穀類ま  
で食性の幅は広い。  
農作物の食害としては、  
ミカン、カキ、ブドウ、  
ナシなどの果物やスイー  
トコーン、スイカ、ミ  
ントマトなど、甘みの  
ある野菜の被害が多い。  
湿地の両生類・は虫類  
や鳥類の卵を食べるた  
め、在来の生態  
系への影響が懸  
念されています。  
先日、矢川で  
もスイカ被害。「もつ  
と太らせて、美味しく  
なった頃食べようと思っ  
ていた矢先。」の出来  
ごと。  
農作物は収穫時期に  
達したら早めに収穫。  
手が器用で力が強く、  
防護ネットや捕獲器を  
こじ開ける。  
スイカにピンポン球  
大の穴を開け、中身を  
食べるのはアライグマ。  
屋根裏に侵入された  
場合は、くん煙剤など  
が効果があります。  
近年、アライグマ回  
虫症など感染症を人間  
に媒介することが知ら  
れています。  
被害が一度発生する  
と常習化し、被害か所  
を中心に新たな被害地  
拡大のおそれがあるた  
め、注意が必要です。

# 主催・名張鳥獣害問題連絡会 第一回 獣害対策研修会開催

## 『地域で取り組むニホンザル対策』

講師  
三重県農業研究所地域連携研究課  
主幹 山端 直人氏  
主幹 研究員・農学博士  
三重県伊賀農林事務所伊賀地域改良普及センター・主幹  
市川 昌樹氏

名張鳥獣害問題連絡会は、講師に両氏を迎え、平成28年7月17日、名張市防災センターにおいて、第一回獣害対策研修会を開催。



日曜日の早朝という出にくい時間帯にも関わらず、大勢の皆さんがはせ参じてくれました。参加者は、その数70人に及び大盛況でした。なかでも、名張西・青峰高校の生徒さんが、先生に引率され参加されていたのが印象的でした。

このような研修会に多数の参加があり、その層が高校生にまで及ぶという事は、取りも直さず鳥獣害が身近に迫り、深刻化していることに他なりません。鳥獣害のない地域をめざすには、獣害に対する基礎知識を研修会などで習得し、共有することが不可欠です。今後は、講習会参加の呼びかけも農業関係者だけでなく、非農家、若年層などにも裾野を広げて継続していききたいと考えています。皆様方の暖かいご支援、ご協力を切にお願い申し上げます。

日曜日の早朝という出にくい時間帯にも関わらず、大勢の皆さんがはせ参じてくれました。参加者は、その数70人に及び大盛況でした。なかでも、名張西・青峰高校の生徒さんが、先生に引率され参加されていたのが印象的でした。



講演される山端氏



※『名張西・青峰高校では、部活で鳥獣害対策を研究されています』

山端 直人氏  
講演より抜粋  
「地域主体で取り組むニホンザル対策」  
■伊賀市での6年間の社会実験の結果。  
サルの問題はほぼ解決に至っている。  
シカについてもかなり使える成果が出ている。中でも、伊賀市阿波地域では被害対策・

個体管理・集落づくりが全て進んでいる。  
■加害獣にとって餌が豊富で安全、この2つが獣害発生条件である。  
■サル被害対策の5箇条。

- ① 集落内の収穫残さや不用果樹など餌場をなくす。
- ② 耕作放棄地や藪などの隠れ場所をなくす。
- ③ 囲える畑はネットや柵のできる限り囲う。
- ④ 里は怖いと覚えさせるため、獣を見たら必ず追い払う。
- ⑤ 個体数の管理。

■獣害の軽減は営農意欲を回復し生き甲斐づくりにもなる。  
■人と野生動物の共存の可能性。  
■組織的な追い払いの考え方。  
集落を一つの農地と意識し  
①サルを見たときは必ず  
②集落の誰も  
③サルが侵入した場所に集まって、複数で  
④サルが集落から出るまで  
⑤煙火、パチンコなどはサルに向かって

6年間、伊賀市で身をもって取り組んだ体験談を含めた説得力のある講演でありました。



講演される市川氏

市川 昌樹氏  
講演より抜粋  
鳥獣害対策の基本的(理想的)な進め方  
■ステップ1 研修会・座談会

研修会・座談会により、獣害対策の基本を理解します。  
■ステップ2 アンケート調査  
①集落の被害状況の把握  
②被害対策の取り組み状況の整理・分析。  
③被害マップの作成。  
■ステップ3 集落の被害状況の把握  
アンケートの分析結果の報告会・研修会により、集落の被害状況等を共有。  
■ステップ4 現地研修会(集落点検)  
集落内の獣害場所、被害対策の現状、エサ場となっている状況などを点検します。  
■ステップ5 問題点や課題の整理  
・近所に誰も利用していない果樹の木がある。  
・お墓のお供え物を持

ち帰らない人が多い。  
・耕作放棄地が多く、草木が生い茂っている。  
・生ゴミや収穫しない作物が畑に放置されている。  
・廃業した果樹園がそのまま放任されている  
・杉林が田畑や人家に覆い被さるところが多い。

・すぐ近くにサルがいても無関心な人が多い  
・地域の中に協力してくれない人がいる。  
・収穫しない作物をそのままにしている。  
・トタン柵の一部が壊れたままになっている  
・稲刈り後の2番穂は、食べられなくても気にならない。  
・隣の畑で柵を設置すると自分の被害が増える。  
・行政や猟友会に任せとおけばよい。  
・高齢者にとってはどうしようもない。など。  
■ステップ6 被害対策の実施  
・補助事業を活用して、7月のサルの動向

7月のサルの動向

### サルの出没状況

名張A・B群

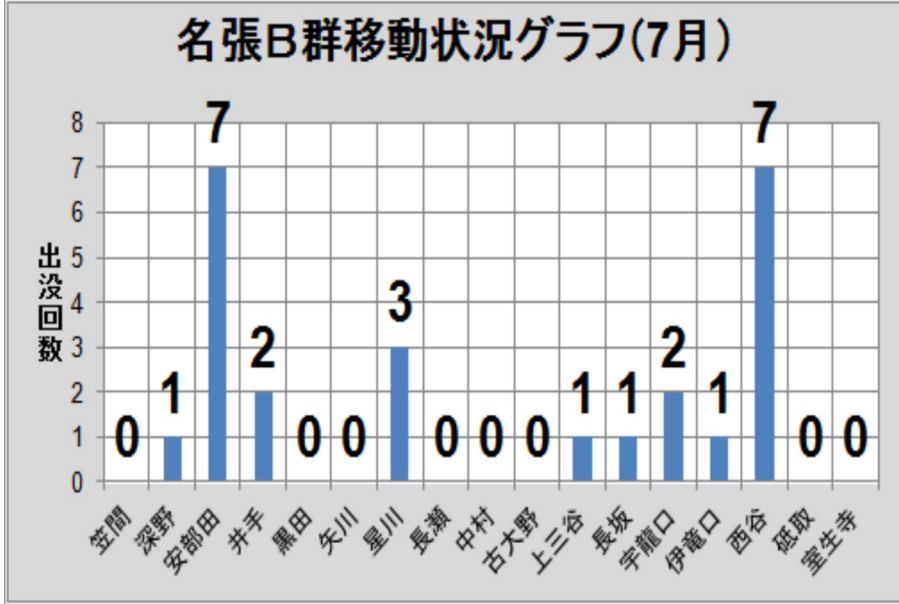
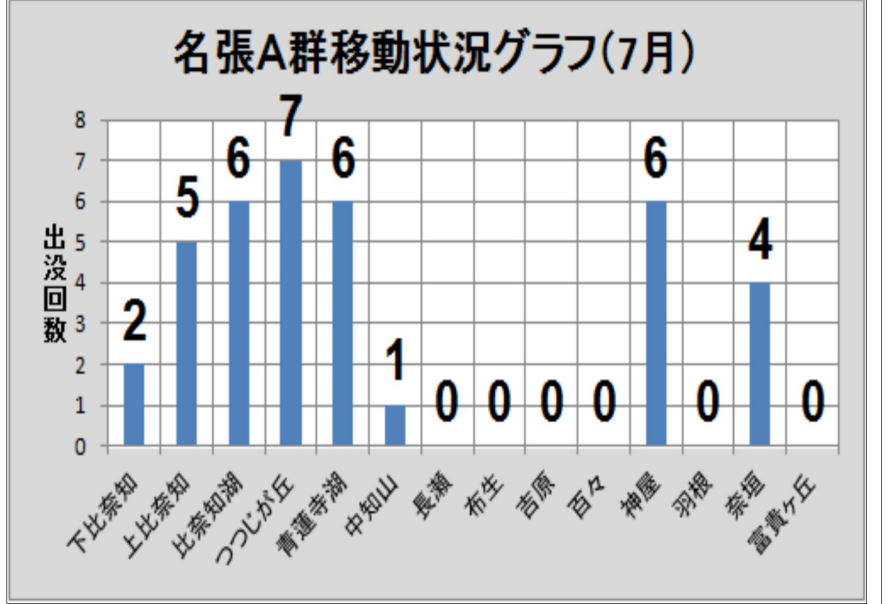
**A群**では、群としての動きが見られますが、B群は、群の体をなしてなく各個体が「メンコン」に行動しているように見うけられます。

**指導員報告**

A群は、青蓮寺湖の桑の実、比奈知湖のアカシアに集中しましたが、7月に入って、滞在日数が少なくなり場所移動が頻繁に行われて、集落内の畑作物を狙った遊動に変わってきました。上比奈知・下比奈知・奈垣・つつじが丘等で畑作物に被害が出ているようです。

B群は、先月後半頃は、井手地区から安部田地区の山間を遊動していました。7月に入って初旬は室生西谷・大和龍口地区付近で遊動していました。中旬以降は竜口から赤目町長坂・柏原・星川・一ノ井と遊動し畑作物に被害が出ているようです。

A・B群共に自然の食餌資源が不足する時期に入り、栽培野菜には、十分注意して下さい。



- #### 発行部数
- 錦生地区：100部
  - 赤目地区：200部
  - ひなち・富貴ヶ丘：200部
  - つつじが丘：430部
  - 箕輪中村：80部
  - 市民センター：120部
  - 名張市議会：20部
  - 名張市役所：20部